

だということを徹底させたい」——と門間教授は強調する。

汚染された樹木の活用

津波で大きな被害を受けた農地の復元と除染とともに、汚染された森林への対策も急務だ。

森林復元チームの林隆久教授(応用生物科学部)は「放射能に汚染された樹木をバイオマスエネルギーとして活用していったらどうか。ひとつの産業モデルにもなる」と言う(7月28日、シンポジウム「東日本大震災からの復興と農山漁村の向かう道」での発言)。

「国土の約7割を森林が占める日本にあって太陽光や風力発電と木質バイオマスの活用を組み合わせ、荒廃した森林の再生、地域経済の活性化につなげる」「30～50年で伐採と植林を繰り返せば除染を兼ねた森林の再生になる」といった考えがある。

市の面積398.5km²のうち山林が約43%を占める南相馬市。同市が策定を目指している「再生可能エネルギー推進ビジョン(案)」に、「復興のために実施する先駆的な事業への取り組み」として▼森林の除染等で発生する可燃廃棄物を活用したバイオマス発電事業▼森林・林業資源再生のため、計画的に間伐・伐採を行うとともに、搬出材などを活用したバイオマス発電事業——の実施の検討を掲げている。森林の間伐を促進し、除染にもつなげようというものだ。

木質チップを燃料にした場合、放射能飛散を防ぐ技術的対策の確立が欠かせない。だが、エネルギー自給



土壌からの放射線量を測定＝玉野地区で。左から2人が門間教授

農業やエネルギーの地産地消を目指す中で、放射能に汚染された木質バイオマスの減容処理としてバイオマス発電の可能性があるのではないだろうか。

(学校法人東京農業大学参与 谷口 弘)

掲 示 板

東京農大「食と農」の博物館で二つの企画展

今知られていること、伝えること

『タロイモ』は語る

タロイモは狩猟採集時代からヒトにとって重要な食用資源で、人類の飢えを支えてきた。今日の地球規模で起きている異常気象や増え続ける人口の食糧不足を補う上からもタロイモの研究は重要だ。同展を主催する(財)進化生物学研究所は、資源植物研究の一環としてタロイモの遺伝資源の調査、保全研究を続け、これまでに35カ国でフィールドワークを行い、約2,000地点でタロイモを収集した。今回は現場からのレポートを紹介するとともに、多くの生きたタロイモを展示してタロイモの世界を知ってもらおう。

古農具展～その技と美～

古農具は長い間、人力、畜力によって使われてきた

民具。今は、農業生産の現場から姿を消してしまったが、我が国の農業の発展に大きく貢献してきた。また、合理的な機能ばかりでなく、木、藁などの自然素材で作られたものの美しさがある。同展では、それらの古農具の用法いわゆる“技”と“造形美”の視点から紹介する。

主催の学術情報課程は学芸員と司書を養成している。東京農大は長い年月をかけて古農具の収集を進め、現在、約4,000点を収蔵している。それらの古農具は産業考古学会で「日本の産業遺産300選」に指定されている。



両企画展は2013年3月24日まで。問い合わせは東京農大「食と農」博物館(世田谷区上用賀2-4-28) TEL03-5477-4033